

三浦綾子『氷点』論

—戦後状況における原罪意識の芽生え—

金 宝栄（キムボーヨン）
（淑明女子大学校 日本学科 修士課程）

1. はじめに

三浦綾子のデビュー作である『氷点』は、朝日新聞社の一千万円懸賞小説に応募し、当選した作品である。多大の注目を集めていたこの懸賞小説に、無名の一主婦が応じ、他の多数の応募作品を抑えて当選したことは、全国に大きな反響を呼び起こした。『氷点』は1964年12月9日から1965年11月14日まで朝日新聞に連載され、連載が終わった次の日に異例的な早さで単行本として刊行された。初版で5万部を印刷した本は当時17版まで続けて印刷し、約45万部が売れベストセラーとなった。そして、ラジオドラマ・映画・演劇などに領域を広げ、当時‘氷点ブーム’という社会現象まで巻き起こすほどの大変な人気を集めた。その後も持続的に放送の題材として話題にのぼり、最近でもテレビドラマとして脚色し放送された¹。このように『氷点』は約40年あまりたった今でも影響力を及ぼしている作品として評価できる。

『氷点』は三浦綾子の代表作なだけに彼女の作品の中で一番よく研究がなされている作品である。しかし、研究のほとんどは作家の生涯と関連させ‘原罪’という主題をもとにキリスト教的な視覚で評価がなされている。これは作家自身が小説の主題について明確に提示しているとともに²、彼女は小説だけでなくいろんな自伝を通して、小説を書くようになった思想的背景や経緯、目的などをはっきりと示している作家であるため、このような観点から離れがたかったと思われる。しかし本稿では『氷点』の研究で主になされたきたキリスト教的な視覚から少し離れて、戦後文学の系譜に連なる作家としての評価に焦点を合わせて『氷点』を考察してみたいと思う。

かつて『氷点』を戦後文学として評価した文芸評論家の高野斗志美は『存在の文学』で次のように述べている。

「『氷点』の作者はみずからいうように戦後の一時期を虚無と絶望のなかで生きた。おそらく氏は、戦中派としての自己の戦後意識を、キリスト者への転換によって原罪のうちへ秘匿し、単純化し、比較的純粋に自己に保有つづけたのだ。それゆえにと私はいわなければならないのだが、『氷点』は、この意味で、あらゆる否定にもかかわらず戦後文学の変種であり、大衆が昭和三〇年代のおわりにおいて読むことができた戦後文学であ

¹ 朝日テレビ「氷点2001」2001年7月～9月放映、朝日テレビ「スペシャルドラマ氷点」2006年11月放映

² 「私は『氷点』において“原罪”を訴えたかった。—原罪をテーマにした小説」『朝日新聞』、1964年7月10日朝刊

る。」³

戦後の虚無感と絶望感を経験した三浦綾子はキリスト教信者として生まれ変わることによって、戦後の意識がキリスト教的な概念である‘原罪’と繋がり、戦争や戦後の問題にこだわりながらこのような問題を‘原罪’の中に秘め、‘原罪’を正面に据えて描いていると説明している。また、彼は高度経済成長期に入り戦後の文学全体が停滞を経験せざるを得ない状況のなかで「『氷点』はまさに、戦後の文学総体の限界をつき破るかのような形」⁴であると論じ、戦後文学の突破口を提示した作品として評価を下している。

このように三浦綾子の『氷点』を戦後文学として評価する傾向がある。特に高野斗志美の主張を解釈したように、原罪という主題の中に三浦綾子の社会的な問題意識を含ませているという意味に同意する立場である。本稿では戦後文学としてのこのような脈略を継ぎながらも、『氷点』は戦後文学としての読みの可能性を考察し、作品の中心のテーマである‘原罪’を把握し、当時の日本の戦後意識を考察することを目的とする。‘原罪’というテーマを時代の中も投影して見ることによって戦後の日本人々の認識と時代の変化の様相が含まれていると見て、これらを通して戦後文学としての読みを拡張していくことを期待する。

2. 作家の戦争体験：三浦綾子の文学の原点

「敗戦と同時に、アメリカ軍が進駐してきた。つまり日本は占領されたのである。そのアメリカの指令により、わたしたちが教えてきた国定教科書の至る所を、削除しなければならなかった。(中略)わたしは七年間、一体何に真剣に打ちこんできたのだろう。過ちを犯したということは無駄とは全くちがう。場合によっては、敗戦後割腹した軍人たちのように、わたしたち教師も、生徒の前に死んで詫びなければならないのではないだろうか。」⁵

これは三浦綾子自身が過去を回顧しながら自伝に記録したものである。三浦綾子は戦争中、小学校の教師として赴任し、教師として誠実に軍国主義教育の任務を果たしていた。しかし敗戦後、時代の流れが変わり、アメリカの占領軍は国定教科書の中に軍国主義が含まれている内容はすべて削除するように指令が下りる。教科書の内容を墨で塗り消すという事態に直面し、三浦綾子は今まで自分が学生たちに自負心を持って教えてきた教育が崩壊したことによって、教師としてまた人間としての信念が崩れ落ち、深刻に自己を反省し、結局は教職から離れ虚無的な人生を送り始める。このような敗戦直後の体験は三浦綾子にとって個人だけに限る問題ではなかった。彼女は直接学生たちに影響を及ぼす位置に当たっており、自分によって及んだ影響に対する責任感や罪悪感がのしかかり、戦争の記憶は自分の力では克服のできない辛い傷跡として残ったのである。そしてこの戦争体験は三浦綾子の人生において決して忘れることのできない大きな転換点となったのであった。

³ 高野斗志美『存在の文学』三一書房、1968年-上出恵子『三浦綾子研究』双文社出版、2001年、p. 67 再引用

⁴ 高野斗志美『評点三浦綾子—ある魂の軌跡』旭川振興公社、2001年、p. 134

⁵ 三浦綾子『道ありき<青春編>』新潮文庫、1980年、p. 16～19

このような戦争体験をした三浦綾子の心境は、『氷点』の主人公である辻口陽子を通して現れているように思われる。

「一途に精いっぱい生きて来た陽子の心にも、氷点があったのだということ。私の心は凍えてしまいました。陽子の氷点は「お前は罪人の子だ」というところにあったのです。この罪ある自分であるという事実を耐えて生きて行く時にこそ、ほんとうの生き方がわかるのだという気も致します。私には、それができませんでした。私はいきる力がなくなりました。凍えてしまったのです。」⁶

この引用文は『氷点』のクライマックスの部分で陽子が自殺を決意した後、遺書に残した文章である。どんなにつらいことがあっても自分は決して悪くない、自分は正しい、無垢であるという思いに支えられて生きてきた陽子であった。しかし、自分が殺人者の娘であることを知らされたとき、自分の力では阻止することのできない、自分の中の罪の可能性を見出し、生きる望みを失うほどの絶望感に覆われ自殺を試みるのである。このような様子は三浦綾子が敗戦後、教師として軍国主義教育という間違った方法で学生を教えてきたことを知ったとき、信念が崩壊し精神的な挫折感および虚無感を感じたことと一脈相通するものがある。

三浦綾子は長編小説である『氷点』を創作するとき、一番最初に書き上げた部分がこの陽子の遺書の章であったと述べたことがある。まさに、この遺書の部分を言い表すために小説を書いたといっても過言ではない。このような重要な場面が、作家の戦争体験と繋がっているということは示唆するところが大きい。それは、三浦綾子の人生においてターニングポイントとなった彼女の戦争体験は三浦綾子を作家として再び誕生させ、『氷点』を書き上げるようになった‘原点’であるということを示している。そして敗戦後に三浦綾子が感じた羞恥心や虚無感も三浦綾子の文学の中心のテーマとなっている‘罪’と繋がって表れているのである。

このように『氷点』は作家の直接的な戦争の体験や戦後の感情が含まれている作品であり、作家の戦争体験を基にした作品であるため戦後文学として十分読み取ることができる。

3. 『氷点』の個人的な原罪

作家三浦綾子の戦争体験を原点にして書かれた『氷点』で設定された時期は、1946年（昭和21年）7月21日から17歳の陽子が自殺する1964年（昭和39年）1月までである。このような時期設定は作家が戦後を意識し、戦後の様子を描くために意図的に設定したものと考えられる。作家の三浦綾子が小説の主題について‘原罪’を訴えたかったとはっきり示しているように、作品に登場する人物はそれぞれ原罪を負っている人間として描かれていて、お互いが密接な関係で絡んでいる。ここでは特に主人公である夏枝と啓造に焦点を合わせ、人物の間の葛藤構造および小説のキーワードである原罪について明らかにしたいと思う。

まず、『氷点』のあらすじをみると、内科の医者で辻口病院長を務めている辻口啓造の妻である夏枝と眼科の医者村井とが密会しているうちに、辻口夫婦の娘であるルリ子が絞殺されたまま発見される。啓造は自分を背信し、娘を死に追い込んだ夏枝に復讐をするため、友人の産

⁶ 三浦綾子『氷点 下』角川文庫、1982年、p. 343

婦人科の医者である高木を通して、ルリ子を殺した犯人の娘である陽子を養女として夏枝に育てさせる。しかし、7年後、偶然に啓造の日記を見て、陽子が殺人犯の娘であることを知り、巧妙な手法で陽子をいじめる。最後に陽子は自分が殺人犯の娘であることを知らされ、自分の中にある罪深さに絶望し、自殺を試み昏睡状態に陥る。しかし結局は陽子は殺人犯の娘ではなかったことが明かされるまでが『氷点』の大体の内容である。

① 夏枝の葛藤関係

夏枝は裕福な環境で育った平凡な人物でありながらも、典型的なエゴイズムの強い人間として描かれている。夏枝の原罪の様子は村井との関係の中であらうかがえる。

「夏枝はあの時ルリ子を外へ出したのが自分であることを忘れたがっていた。責任を村井に転嫁したかった。村井のせいにすることによって夏枝は、心の負担を軽くしたかった。その身勝手さに夏枝は気づかなかった。」⁷

夏枝と村井との密会が行われている間、わずか3歳であったルリ子が殺害されてしまう。しかし夏枝は母としてルリ子を守れず外に追い出したことについて痛感しようとはせず、ルリ子の死の原因が自分にあるということに対して‘心の負担’と感じ、罪の意識から逃れるため事件の責任をすべて村井に転嫁しようとしている。夏枝は自分の犯した罪を自覚していないだけでなく、自分を正当化する行為とともない他人に責任を追い詰めることもなお罪になるということを認識していない。夏枝の姿を通して、ごく平凡で優しくもあった彼女がだんだんと自己中心的な態度によって罪の墮落に陥る様子を見せることによって、人間はだれでも根本的な罪を犯しながら生きており、みんな潜在的に罪を犯すことのできる可能性を持っているということを訴えているように考えられる。

夏枝は陽子との関係の中でもっと強い自己中心的な姿を現す。陽子が殺人犯の娘であることを知った時、衝動的に両手で陽子の首を絞め殺そうとしたり、家族には平然と何の変わりもない生活をしているように見せかけながら、些細なことがらで巧妙にいじめはじめる。相手の立場は全く考慮せず、自己満足のために起こした行動である。特に、衝動的に陽子の首を絞めるという行為は、殺人犯である佐石がルリ子に犯した行為と重なり、これによって佐石が犯した犯罪行為は夏枝にも十分可能性があるということを証明している。このように瞬間的な衝動および潜在性によって罪を犯す姿を通して原罪という概念が提示される。夏枝の中にある原罪とは、自己中心的な姿であり、夏枝の自己中心的な心構えと行動は葛藤関係を複雑に絡む要素として作用するのである。次の場面は、夏枝のエゴイズムがピークに達した部分である。

「(何も死ななくてもいいのに)

自分への面あてのように薬を飲んだ陽子を、夏枝は心の中で責めていた。かわいそうだと思うよりも、自分の立場も考えてみてほしいと夏枝は思っていた。

(このまま死なれたら、人はわたしを何というだろう)」⁸

⁷ 三浦綾子『氷点 上』角川文庫，1982年，p. 96

⁸ 三浦綾子『氷点 下』角川文庫，1982年，p. 354

夏枝が陽子に出生の秘密を明かした後、陽子が自殺を試みた姿に接した夏枝の様子である。この部分は小説のクライマックスの部分で、17年間自分の娘として育ててきた陽子が自分の言行で自殺を図り死の間際にいるにもかかわらず、夏枝の姿には自己反省や過ちに対する悔いの様子はまったく見えない。むしろこんな瞬間でも自分が非難されるかもしれない状況を作り上げた陽子を責めているのである。普通、人間は死という存在の前では完全に無気力となり完全に降伏するものであるが、夏枝は最後まで自己中心的で自己愛が強く、自分の罪を罪と認識できない姿を現している。

② 啓造の葛藤関係

啓造は医者という職業に伴い、周りの人たちから信頼を得ている人物であるが、自我の理性的な感情と本能的な行動の間で葛藤している。次の文章はそのような葛藤をよく見せてくれる。

「その夜啓造は、自分自身の愚かさを悔いていた。
(何で佐石の娘を、夏枝に育てさせようと思ったのだろう)
(だが、あの時おれは夏枝をゆるすことができなかった)
(と、いって、ゆるさなかったばかりに、誰もかれも不幸にってしまったのではないか。
復讐しようとして、一番復讐されたのは自分自身ではなかったか)」⁹

啓造自身が犯した復讐劇が妻の夏枝に発覚した後、啓造の二つの内面がぶつかり合っている姿を現している。啓造は「汝の敵を愛すべし」¹⁰という聖書の言葉をいつも心の中にしまい、理性的に判断を行いそのような姿を保とうとするのであるが、彼の行動を結果的にみると本能的な衝動により動いている。夏枝が不倫を犯したことを知った時、面と向かっては何にも言わず自分の感情をあらわにしないのだが、そっと殺人犯の娘を育てさせることによって復讐を敢行する。また、理性的に考えたとき陽子には何の罪もない子だとわかってはいるのだが、殺人犯の娘ということを知っているため、無意識のうちに陽子に対して拒否反応を起こす。このように啓造の原罪は善と悪を区別することができる理性的な判断力をもっているにもかかわらず、本能的に悪の方を選択する彼の姿から原罪を見つけ出すことができる。

しかし啓造にはこのような原罪を克服しようとする意志が見られる。自分の中に潜んでいる二重的な内面と罪の意識とがぶつかり合いながら、自己の省察が行われている。特に、啓造は殺人犯である佐石に向かっていた感情が憎しみを含んだ敵対視する観点から理解関係へと移行する。その理由は佐石の容貌と成長過程（タコ部屋労働など）を知った後に、憎悪の感情より同情するようになったことと、啓造も佐石と似たような状況（小さい女の子が恐ろしい目で自分らを見つめた経験）におかれたとき、自分も殺人の衝動が起こったことを思い出す。ここで啓造は佐石と共感を形成し、自分も殺人の可能性を持っていることを認識し、人間にはそう大きな差がない存在であることに気づく。これで内面の罪を認識する段階に至る様子をうかがえるのである。

⁹ 三浦綾子『氷点 下』角川文庫，1982年，p. 130

¹⁰ 三浦綾子『氷点 上』角川文庫，1982年，p. 22

③ 夏枝と啓造の相違

夏枝と啓造を中心として葛藤関係の様相とともに原罪意識について探ってみたが、彼らの共通する点として葛藤を起こす要素は自己中心的な態度だと言える。それぞれ自己愛が強いため、内面で受けている傷を表面には表さないのであるが、これによってお互いの誤解が積もり葛藤を生み出すのであった。しかし、この二人は原罪を認識する面において大きな差がある。夏枝の場合、他人に事件の原因と責任を転嫁し自分だけを正当化させ、罪の自覚が行われないのに対して、啓造の場合は人間の本能的な衝動で過ちを起こすのだが、だんだんと自分の罪の性質を問題化し省察するようになり、医者である自分も殺人犯とあまり違いのない罪を持っていることを発見する。夏枝の姿を消え去る罪意識と表現するならば、啓造は自覚する罪意識と言えるだろう。

このような夏枝と啓造が持つ原罪は、日常生活の中で起っていることを基に姿を現していることに着目してみたとき、このような事柄は小説の人物に限って起こることではなく、一般の大衆にも原罪の問題を呼びかけていることが感じ取れる。次の項目では分析した葛藤の様相を通して日本の戦後社会と結びつけて見ることによって、社会の内部に存在する問題点を対比して見てみたい。

4. 戦後文学として読む：戦後に表れる社会的原罪

ここでは『氷点』に登場する人物と当時の社会像とを結びつけ、日本の戦後社会が持っている社会的な不条理と繋がっている部分を考察してみたい。

① 社会的弱者に対する認識

「佐石は東京の生まれで幼時両親を関東大震災で一時に失い、伯父に養われて青森県の農家に育ち、昭和九年の大凶作に十六歳で北海道のタコ部屋に売られ、後転々とタコ部屋に移り歩いた。昭和十六年入隊、中支に出征中戦傷を受け、第二陸軍病院に後送、終戦直前渡道、日雇人夫として旭川市神楽町に定住、結婚した。内縁の妻コトは女兒出産と同時に死亡」¹¹

「タコの悲惨さは、想像以上であった。だから、憎い犯人であっても、佐石が十六歳の時、養父にタコ部屋に売られたということには同情ができた。（タコ部屋から軍隊に入り、戦地で負傷をして……とすると、なんだ、この男は自由な社会というものをほとんど知らないんじゃないか）」¹²

この引用文は『氷点』に記録されたルリ子の殺人犯である佐石の成長過程についての説明と、佐石の過去を知った啓造が感じた感情が記されたものである。佐石の生涯は関東大震災で孤児になり、東北の大凶作、北海道のタコ部屋労働、中支出征と戦傷、そして戦後の物不足と混乱の中

¹¹ 三浦綾子『氷点 上』角川文庫，1982年，p. 57

¹² 三浦綾子『氷点 上』角川文庫，1982年，p. 62

で子供の出産とともに内縁の妻が死亡してしまう。佐石はまるで近代の日本が通った悲惨を一身に集約して背負わされたように見える。佐石が成長してきた周辺的な環境は彼を社会の下層民として落とし、彼は社会構造の中で力行使できない弱者側に属するようになる。特に、彼の人生の大きな部分を占めていたタコ部屋労働は戦争が終了するまで北海道で行われた過酷な労働システムで、労働者をかなりの期間身体的に拘束して行われた非人間的環境下に置かれたものであった。彼らは北海道やサハリンの工場現場または炭鉱で過酷な肉体労働をさせられた。朝早くから晩遅くまで一日15時間以上仕事をさせられ、過酷な労働条件により労働者の脱走が相次ぎこの事態を防ぐため、外出禁止はもちろん作業場の出口を閉めたり監視するようになりご飯も立ったまま食べなければいけなかった。このような経験を持つ佐石によって小説の中心の事件であるルリ子の殺害事件が起こったということに注目して見る必要がある。佐石は原罪の始発点といえる事件を起こした主導者であるが、彼が犯行を起こした理由として彼の育ってきた周りの環境は佐石を鋭く荒い人間に育ち上げ、戦後疲れ果てた人生をいきているうちに神経衰弱にかかり犯行に及んだのである。結局、彼が犯罪を起こすことになった要因として、戦争時から続き戦後も弱者としての疲弊した生活から離れることのできない環境が関連していることがわかる。そしてこのような佐石の一連の生涯の課程は啓造によって説明され理解関係が形成される。娘を殺された啓造は憎しみではなく、同情の視線で佐石と向かい合い説明されることによって、弱者として代表される佐石を直視する大衆の視線は啓造と同じ観点としてみることになり、小説を通して大衆は戦後の状況において社会的弱者の存在について認識する段階に至ったのであろう。

② 記憶の忘却（消え去る罪意識）

「北原と陽子の前にすべてをしられる明日のことを思った。陽子は苦しむかも知れない。しかし被害者である自分たちだけが長い間苦しんできたのに、加害者側が何も知らずにいるということは、不当に思えた。陽子も苦しみをわかつのが当然だと夏枝は考えた。」¹³

「日本人のあいだに被害者意識が根を張り、この戦争の最大の犠牲者は自分たちだと多くの者が思ったとしても驚くにはあたらなかった。」¹⁴

この引用文はそれぞれ『氷点』と日本の敗戦後の状況を記録している『敗北を抱きしめて』から抜粋したものである。この文章の共通点として挙げられることは、客観的に見たとき加害者の立場にいるべき彼らが、自分たちは被害者であると思っていることである。夏枝は分析でもうかがえたように、自分の過ちについて気づかないまま自己中心的に思考し行動する人物として登場する。これらを総合して‘消え去る罪意識’を持つ人間として解釈したのであったが、このような姿は当時の社会像と照らし合わせて見たとき、戦争に対する記憶の部分と重なってくる。1950年代後半から日本は高度経済成長期に突入し、急速に成長を成し遂げ、1964年『氷点』が発表された同じ年にはアジアでは初めて東京オリンピックが開催され高度成長期の雰囲気はピークに至る。日本はもう戦争の傷跡を負っている敗戦国ではなく、戦後から脱戦後に向けて歩みだしてい

¹³ 三浦綾子『氷点 下』角川文庫、1982年、p.310～311

¹⁴ ジョンドワー『敗北を抱きしめて 上』岩波書店、2004年、p.132

た。戦争の記憶を消し去るように社会や文化の面などで対外的に活発な動きがあった時期であった。日本の社会を表面的な部分を見れば、戦後すべての問題が克服されたかのように見えたが、内部の事情を踏み込んでみると戦争に対して過ちを犯した日本側の謝罪や戦争責任問題などが依然として残っていた。また急速に高度経済成長期を迎えた日本人たちの心情には、戦後の絶望感や虚無感などが補われぬまま社会の高揚された雰囲気についていかなければならない不安な心情的な問題なども発生した時期であった。このような状況の中で時期適切に登場したものが小説『氷点』であり、大衆は小説の人物を鏡のように照らし合わせ、人間ならば生まれながら持つ原罪という概念を接することによって、不完全で空虚な心情の回答を『氷点』の中で見つけたと思われる。

5. むすびに

三浦綾子の『氷点』の原点が作家の直接的な戦争体験であったということをもとにして、主に原罪というキーワードでテキストを分析し、これらを通して日本の戦後の状況および日本の大衆認識について考察した。特に、小説の中の人物を通してみた葛藤の様相と原罪意識を社会に適用してみたところ、社会の不条理を意識して表しているということがわかった。また、一般的に‘原罪’という言葉はキリスト教的な概念の枠内で使われるものであるが、ここでは‘原罪’いう概念を一般の大衆にまで拡大させ普遍性を持つ要素に仕上げている。

「他人の殺害を阻止するために生命を捧げず、腕を組んだままだ見ていただけだったならば、自分自身に罪があると思う。そのようなことが発生した後でもまだ私が生きているのなら、洗うことのできない罪となって私を覆う。」¹⁵

この文章は『記憶と忘却』という戦後処理問題について述べている本の表紙に書かれている文句で、戦争責任に対して開けた人たちの内部の心情が告白されているものである。まさに、このような罪の意識は、『氷点』で表している原罪と繋がりを持つ。この‘原罪’という概念は戦後の高度経済成長を果たし、安定的な生活風潮が定着していく中で、目まぐるしく過ぎ去ってきた戦後に忘れ去られていた過ち、つまり戦争や戦後の原罪を認識する要素として『氷点』は読者の大衆たちに役割を十分に果たしたと思うのである。

¹⁵ 田中宏 外5人, 李奎秀訳『記憶と忘却』（原題『戦争責任・戦後責任』）サムイン, 2000年